

ロッシーニ《幸せな間違い》作品解説

水谷 彰良

初出は、日本ロッシーニ協会ホームページ掲載の作品解説を増補改訂した紀要『ロッシーニアーナ』第36号(2016年2月発行)掲載の拙稿「ロッシーニ全作品事典(31) 幸せな間違い」。書式を変更し、一部改訂して日本ロッシーニ協会ホームページに掲載します。(2016年4月)

I-4 幸せな間違い *L'inganno felice*

劇区分 1幕のファルサ・ペル・ムジカ (farsa per musica in un atto)

台本 ジュゼッペ・[マリーア・] フォッパ (Giuseppe [Maria] Foppa, 1760-1845)

単幕、全16景、イタリア語

原作 不明。 註: ジュゼッペ・パロンバ (Giuseppe Palomba) がバイジェットのオペラのために書いた同題の台本 (1798年) とする従来説は、台本の比較研究で否定されている (解説参照)。

作曲年 1811年12月~12年1月初頭 (推測)

初演 1812年1月8日 (水曜日)、サン・モイゼ劇場、ヴェネツィア

註: 初版台本は Teatro Giustiniani in San Mosè と記載。

人物 ①ベルトラント Bertrando (テノール) ……公爵

②イザベッラ Isabella (ソプラノ) ……ベルトラントの妻 註: 劇中でニーザ Nisa と称する。

③オルモンド Ormondo (バリトン) ……公爵の友人

註: 初演に先立ちセコンド・テノール役と告知されたが、実質的にバリトン役。

④バトーネ Batone (バス) ……オルモンドの友人

⑤タラボット Tarabotto (ブッフオ) ……鉦夫長

他に鉦夫、兵士たち (黙役)

初演者 ①ラッファエーレ・モネッリ (Raffaele Monelli, 1782-1859) 註: 初演時のプリモ・メツ・カラッテレ・アツソルート

②テレエザ・ジョルジ・ベッロク (Teresa Giorgi Belloc, 1784-1855) 註: 初演時のプリマ・ドンナ・ブッフア・アツソルータ。なお、Teresa Giorgi Belloc は初演時の芸名。生名と他の芸名については解説参照

③ヴィンチェンツォ・ヴェントウーリ (Vincenzo Venturi, ?-?) 註: 初演時のアルトロ・プリモ・ブッフオ

④フィリッポ・ガッリ (Filippo Galli, 1783-1853) 註: 初演時のプリモ・ブッフオ

⑤ルイーダ・ラッファネッリ (Luigi Raffanelli, 1752-1821) 註: 初演時のプリモ・ブッフオ

管弦楽 1ピッコロ、1フルート、2オーボエ、2クラリネット、1ファゴット、2ホルン、弦楽5部、レチタティーヴォ・セッコ伴奏楽器

演奏時間 序曲: 約6分、全1幕: 約78分

自筆楽譜 不明 (未発見。興行師アントーニオ・チェーラの所蔵となり、その後消失と推測)

初版楽譜 Breitkopf und Härtel, Leipzig, 1818-9. (ピアノ伴奏譜初版。レチタティーヴォ・セッコ含まず)

Leopoldo Ratti, Gio. Batta Cencetti, e Comp^a, Roma, 1827. (総譜初版)

全集版 未成立

構成 註: 自筆楽譜消失のため確定しない。1994年ロッシーニ・オペラ・フェスティバル上演プログラムは二重唱の後のレチタティーヴォに独立ナンバーを与えて序曲と9曲に区分したが、2015年プログラムはナンバーを付さずに序曲と8曲に区分。以下は後者にナンバーを与えるなどして独自にアレンジした。

序曲 [Sinfonia]: 二長調、3/4拍子、アンダンテ・ソステヌート~4/4拍子、アレグロ・ヴィヴァーチェ

N. 1 導入曲 (なんだと! われらの公爵がいま Cosa dite! il nostro duca) (タラボット、イザベッラ)

— 導入曲の後のレチタティーヴォ (それはともかく、何を隠しているのだね Ebben: che ascondi) (タラボット、イザベッラ)

N. 2 ベルトラントのカヴァティーナ (なんと優しい喜びが Qual tenero diletto) (ベルトラント)

— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ (10年も経つというのに Nè pon due lustri) (ベルトラント、オルモン)

ド、バトーネ、タラボット、イザベッラ)

N. 3 レチタティーヴォ〈ばらばらにされる前に *Prima d'andar*〉とバトーネのアリア〈あの声が私を打った *Una voce m'ha colpito*〉(バトーネ)

— アリアの後のレチタティーヴォ〈彼は決めかねたままだわ *Egli restò indeciso*〉(イザベッラ、タラボット)

N. 4 レチタティーヴォ〈罪なき者の守護者である天よ *Ciel, protettor dell'innocenza*〉、タラボット、ベルトランド、イザベッラの三重唱〈あの顔、あの眼差し *Quel sembiante quello sguardo*〉(タラボット、ベルトランド、イザベッラ)

— 三重唱の後のレチタティーヴォ〈(ああ！ 彼女はいい印象を) *Oh! la impressione è fatta*〉(ベルトランド、タラボット、オルモンド)

N. 5 レチタティーヴォ〈なんて調査だ！ *Quale inchiesta!*〉とオルモンドのアリア〈おまえはおれを知ってるな *Tu mi conosci, e sai*〉(オルモンド、タラボット、ベルトランド、バトーネ)

N. 6 レチタティーヴォ〈(いつものことだ) *Ecco la solita*〉、バトーネとタラボットの二重唱〈囁く者もいるが *Va taluno mormorando*〉(バトーネ、タラボット)

— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈奴はやる気だな！ *È deciso!*〉(タラボット、イザベッラ)

N. 7 レチタティーヴォ〈ではあらためて *Al nuovo di*〉とイザベッラのアリア〈最も優しく愛しいお方に *Al più dolce e caro oggetto*〉(イザベッラ)

— アリアの後のレチタティーヴォ〈我を忘れそうだ！ *Son fuor di me!*〉(ベルトランド、オルモンド、タラボット)

N. 8 フィナーレ〈穏やかで静かな夜 *Tacita notte amica*〉(バトーネ、イザベッラ、タラボット、ベルトランド、オルモンド)

物語 (時と場所の指定なし。単にイタリアとされるのみ)

山間の大きな谷。炭坑から出てきた鉱夫長タラボットは、鉱夫の一人からベルトランド公爵が来ると聞いて驚き、鉱夫たちに坑道に戻るよう命じて話を確かめるべくその場を去る。イザベッラが公爵の肖像を忍ばせたロケットを手に現れ、夫に思いを馳せる(彼女は10年前にベルトランド公爵の妻だったが、横恋慕したオルモンドの差し金で不貞の疑いをかけられ、小舟で海に流され死んだと思われていた。だがタラボットに救われ、彼の姪ニーザ[Nisa]として養われていた)。そこに戻ったタラボットは、イザベッラの持つ公爵の肖像を見て不審に思う(N.1 導入曲)。問い質されたイザベッラは、隠し持つ書付をタラボットに見せる。それを讀んだタラボットは、彼女が公爵夫人であり、オルモンドに命じられたバトーネによって舟で海に流された経緯を知る。

二人が家に入ると兵士たちを伴ってベルトランド公爵が現れ、妻を憎みながらも愛の思いを断ち切れぬ苦しみを歌う(N.2 ベルトランドのカヴァティーナ)。領地が敵から攻撃される恐れのある公爵は、オルモンドとその腹心バトーネを伴って境界付近の調査に来て、タラボットから付近の地形を教えてもらおうと考えていた。タラボットの家を見つけたバトーネは、タラボットの姪に飲み物を所望する。イザベッラは彼がバトーネと気づき、バトーネも彼女に見覚えがあるので当惑し、その場を去る(N.3 レチタティーヴォとバトーネのアリア)。

タラボットが戻り、「公爵が家に来る」とイザベッラに教える。そして公爵が来ると、姪のニーザと偽って彼女に地図を持って来させる。公爵は彼女がかつての妻に顔が似ているので驚くが、タラボットからあらためてニーザと言われて戸惑う。複雑な心境のイザベッラも、公爵に正体がばれぬようふるまう(N.4 レチタティーヴォ、タラボット、ベルトランド、イザベッラの三重唱)。

公爵からイザベッラが本当に死んだのかと問い質されたオルモンドは、バトーネに今夜ニーザを誘拐するよう命じ、命令に従うよう威嚇して立ち去る(N.5 レチタティーヴォとオルモンドのアリア)。物陰で彼らのやり取りを聞いたタラボットはイザベッラの命が危ないと悟るが、バトーネはなぜタラボットの姪を誘拐するのか理解できない。そして素知らぬ顔で現れたタラボットに彼女が本当に姪か尋ね、「誰かがあなたに姪はいないと言ってましたよ」と探りを入れ、タラボットはそんな馬鹿な話があるかと笑い飛ばす(N.6 レチタティーヴォ、バトーネとタラボットの二重唱)。

タラボットはイザベッラにオルモンドの企てを教え、公爵にすべてを話すよう勧める。そして公爵が現れると、イザベッラは遠まわしに自分の置かれた状況を話し、悪人から守ってくださいと訴える(N.7 レチタティーヴォとイザベッラのアリア)。タラボットも公爵に姪の保護を頼み、公爵もそれを約束する。

夜陰に乗じて手下を連れたバトーネが現れ、タラボットの家へ忍び入ろうとする。イザベッラはかつて助けられた時に着ていた公爵夫人の衣装を身に付けて家を抜け出し、タラボットと共に木陰に身を隠す。公爵も従者を伴って現れ、洞窟に隠れる。オルモンドが現れ、バトーネから家に女がいなくなると言われ、確かめるために家に入ると公爵が姿を現し、オルモンドが戻ったらなぜ女を誘拐するのか問え、とバトーネに命じて身を隠す。問われたオルモンドが求愛を拒んだ公爵夫人にはらいた悪事を語ると、公爵が飛び出してオルモンドを捕らえさせ、後悔のあま

り自殺しようとする。それを止めるべく、イザベッラとタラボットが飛び出す。イザベッラと和解した公爵は命乞いをするバトーネを許し、連行されたオルモンドを除く全員で「悪事は露見し、罪なき者は桂冠を受け、裏切り者は罰せられる」と歌って幕となる（N.8 フィナーレ）。

解説

【作品の成立】

1810年11月3日にヴェネツィアのサン・モイゼ劇場で1幕のファルサ《結婚手形》を初演してオペラ作曲家となったロッシーニは、翌1811年初頭からボローニャの音楽アカデミーでマエストロ・アル・チェンバロとして活動した。秋には同地のコルソ劇場のマエストロ・アル・チェンバロ兼合唱指揮者のポストを得てオペラの作曲を求められ、10月26日に2幕のドラマ・ジョコーゾ・ペル・ムジカ《ひどい誤解》を初演して好評を得た。けれども台詞や人物設定が公序良俗に反すると警察当局に批判され、上演は最初の3回で打ち切られた¹。

11月末にコルソ劇場の仕事を終えたロッシーニは、続く1811/12年謝肉祭の新作をサン・モイゼ劇場興行師アントーニオ・チェーラ（Antonio Cera,?-?）から求められており、これを作曲すべくヴェネツィアに移った。《幸せな間違い（*Linganno felice*）》の台本は、ジュゼッペ・フォッパ（Giuseppe Foppa, 1760-1845）によりあらかじめ準備されていた。フォッパはヴェネツィアの裁判所の書記官をしながらサン・モイゼ劇場の台本を手掛けた詩人で、生涯に書いた台本は約150にのぼる（ロッシーニ作品は《幸せな間違い》《絹のはしご》《ブルスキーノ氏》《シジスモンド》の4作）。《幸せな間違い》の原作は不明で、従来文献におけるパイジェッロのためのジュゼッペ・パロンバ台本《幸せな間違い（*Linganno felice*）》（1798年）とする説は台本の比較研究によって否定され²、伝説や説話にしばしばみられる設定——高貴な女性が夫や恋人に誤解されて不遇の身となり、殺されそうになるが、同情した者によって救われる——をフォッパが独自に再話したと推測され、これに先立つフォッパの劇『マティルデ、または森の女（*Matilde ossia la donna selvaggia*）』も同様の背景を持つ（1800年1月29日ヴェネツィアのサンタンジェロ劇場初演。出版は1807年。後に《シジスモンド》の原作となる）³。

《幸せな間違い》は海に臨む山間の谷の傍らに坑口が見えるという舞台設定で、夫に捨てられ鉱山で暮らす公爵夫人をヒロインに、ロマンティックな雰囲気漂うなか次の物語が繰り広げられる。

全1幕 山間の谷の鉱夫長タラボットは海岸に流れ着いたイザベッラを救い、自分の姪と偽って10年間保護していた。彼女はかつてバルトランド公爵の妻だったが、横恋慕したオルモンドによって不貞の疑いをかけられ、小舟で海に流され死んだと思われていた。ある日、鉱山を視察した公爵は、妻にそっくりな女を見て驚く。イザベッラは夫の誤解が解けるまで正体を明かさぬつもりでいたが、悪事の露見を恐れたオルモンドがイザベッラを誘拐して殺そうと企む。これを知った公爵はオルモンドを逮捕させ、イザベッラへの仕打ちを詫言びて再び妻を迎える。

初演を予定した1811/12年謝肉祭のサン・モイゼ劇場では、名歌手テレーザ・ベッコク（Teresa Belloc [生名：マリーア・テレーザ・オッターヴィア・ファウスティーナ・トロンベッタ Maria Teresa Ottavia Faustina Trombetta], 1784-1855）をプリマ・ブッフア・アッソルータとする歌手団が組まれていた。ベッコクは当時の北イタリアを代表するソプラノ歌手で、トリノのレージョ劇場に17歳でマリーア・テレーザ・ジョルジ（Maria Teresa Giorgi）の芸名でデビューし、1804年に19歳でミラーノのスカラ座のプリマ・ドンナとなり、06～07年にも同劇場のプリマ・ドンナを務めた（その間アンジェロ・ベッコクと結婚し、芸名に「Teresa Giorgi」「Teresa Belloc」「Teresa Bellocchi」「Teresa Giorgi [-] Belloc」「Teresa Belloc [-] Giorgi」が使われ、現在の文献では「テレーザ・ベッコク Teresa Belloc」または「マリーア・テレーザ・ベッコク Maria Teresa Belloc」が使われる）。1810年のナポリ・デビュー、パーエル作曲《グリゼルダ》タイトルロールでも「（ベッコクは）豊かで心の琴線にふれる声で格別の喝采を博している。これ以上真実に歌うこと、これ以上技巧のかつ魅力的に魂の情熱と動きを表現して歌うことは出来るものではない」（『コリエーレ・デッレ・ダメ（*Corriere delle Dame*）』1810年7月14日付）⁴と絶賛されるなど、高い評価を得ていた（彼女は後に《泥棒かささぎ》ニネッタを創唱する）。

ベッコク以外の特筆すべき歌手は、バトーネ役フィリッポ・ガッリ（Filippo Galli, 1783-1853）である。1801年ナポリでテノールとしてデビューし、重い病気を経て1811年にバス歌手として復帰した若き逸材で、壮麗にして柔軟な声に恵まれ、《セミラーミデ》に至る重要作品の初演歌手となる⁵。



テレーザ・ベッコク



フィリッポ・ガッリ

ロッシーニと興行師の間で交わされた契約書は未発見で、ロッシーニがヴェネツィアに移ってから1812年1月8日に初演を迎えるまでのドキュメントも存在しない（現存するロッシーニの両親宛の書簡は初演の翌月《パビロニアのチーロ》のためフェッラーラに移って書かれたのが最初で、《幸せな間違い》にふれられない）。けれども初演の成功とその反響については、後日ロッシーニ自身が母宛の手紙で言及している（1月9日付。【上演史】参照）。

【特色】

本作は形式的には1幕ファルサに該当するが、劇の内容からオペラ・セミセーリア（opera semiseria）にも区分しうる。このジャンルは18世紀後半に感傷的メロドラマやお涙頂戴劇としてフランスで誕生し、イタリア・オペラではパイジェットの《ニーナ、または恋に狂った娘（*Nina, o sia La pazza per amore*）》（1789年）が広く流布したが、フランス革命期に不当逮捕や公開処刑が日常化すると窮地からの脱出や救出を盛り込む救出劇（ピエス・ア・ソヴタージュ [pièce à sauvetage]）に関心が移った。その出発点が、ベートーヴェン《フィデーリオ》の原点に当たるジャンニコラ・ブイイ（Jean-Nicolas Bouilly, 1763-1842）台本、ピエール・ガヴオー（Pierre Gaveaux, 1761-1825）作曲のオペラ・コミック《レオノール、または夫婦の愛（*Léonore, ou L'Amour conjugal*）》である（1798年2月19日パリのフェイド劇場初演）。ロッシーニ作品は《幸せな間違い》が最初で、その後4作が作られる（《トルヴァルドとドルリスカ》《泥棒かささぎ》《マティルデ・ディ・シャブラン》《アディーナ》）。

セミセーリアのドラマゆえ、《幸せな間違い》の登場人物は真面目な性格（ベルトランド公爵とイザベッラ）と喜劇的性格（オルモンドとバトーネ）に分けられ、タラボットは中間の役柄ながら実質的に真面目な性格を持つ。ロッシーニは各人の性格を音楽で描き分け、導入曲におけるイザベッラ登場のソロやフィナーレ冒頭バトーネのソロに抒情的で優美な旋律を与えた。楽曲は序曲[シンフォニア]と八つのナンバーからなり、序曲はロマンティックで叙情的な雰囲気をかもし出す冒頭部が秀逸で、第二主題は習作期の《シンフォニア》（ニ長調、1808年）から再使用されている（《幸せな間違い》序曲は次作《パビロニアのチーロ》序曲にそのまま転用される）。



《幸せな間違い》総譜初版のタイトル頁（ローマ、1827年。ロッシーニ財団所蔵）

導入曲〈なんだと！われらの公爵がいま（*Cosa dite! il nostro duca*）（N.1）はモチーフの反復をベースにした活気ある音楽で始まり、中間部にフルートとオーボエ独奏の抒情的な旋律（パイジェットの音楽を想起させる）に導かれてイザベッラのソロ〈なぜおまえの心から追い払えるのでしょうか（*Perchè da tuo seno*）を挟み、イザベッラの魅力的な楽想とタラボットとの掛け合いの終結部で閉じられる。続くベルトランドのカヴァティーナ〈なんと優しい喜びが（*Qual tenero diletto*）（N.2）はフルート独奏の装飾的なオブリガートに特色があり、後半部に《ひどい誤解》ヒロインの合唱付きロンド〈もしもお前に幸せが戻ったら（*Se per te lieta ritorno*）（N.18）のパスセージも使われる。

バトーネのアリア〈あの声が私を打った（*Una voce m'ha colpito*）（N.3）はバスの幅広い声域と技巧を駆使する秀曲で、二人のバスの軽妙で爽快な早口言葉を含むバトーネとタラボット二重唱〈囁く者もいるが（*Va taluno mormorando*）（N.6）も愉快。中でも優れた楽曲が、変化に富みセンス抜群の男声三重唱〈あの顔つき、あの眼差しが（*Quel semblante quello sguardo*）（N.4）、優美なカンタービレと技巧的カバレッタの対比が見事なイザベッラのアリア〈最も優しく愛しいお方に（*Al più dolce e caro oggetto*）（N.7）である。男声三重唱はハ長調、4分の4拍子、アンダンテ・マエストーゾで始まり、タラボットが低弦と同じ動きで歌うユニークな部分を挟んでアレグロに転じ、活気あるヴィヴァーチェで閉じられる。イザベッラのアリアはハ長調、4分の4拍子、アンダンテの優美な旋律で始まり、アレグロに転じてすぐにピウ・レント〜プリモ・テンポの魅力的なパスセージの頻出するカバレッタとなる（最高音はc^m）。

これに対し、オルモンドのアリア〈おまえはおれを知ってるな（*Tu mi conosci*）（N.5）にはモーツァルトを想起させる動機が含まれ、スタイルはやや旧弊である。フィナーレ〈穏やかで静かな夜（*Tacita notte amica*）（N.8）は規模の大きなアンサンブルで、ニ長調、4分の4拍子、アンダンテ・マルカートでバトーネがしっかりと歌い始め、他の人物が順次加わって進行し、へ長調、4分の2拍子、アレグロ〜4分の4拍子、アレグロ・ヴィヴァーチェを経てニ長調に転じ、4分の2拍子、ヴィヴァーチェの華やかなアンサンブルの終結部で締め括る。



バトーネのアリア（パリ、1819年頃。筆者所蔵）

【上演史】

1812年1月8日にサン・モイゼ劇場で行われた初演は輝かしい成功を収め、ロッシーニに最初の栄光をもたらした（初日のみ単独上演で、1作のバレエが併演されたと思われる）⁶。翌日、興行師チェーラはロッシーニの母アンナに

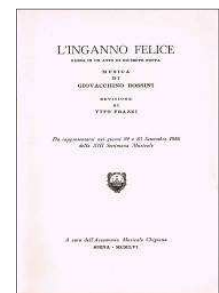
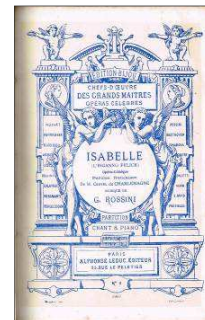
手紙を送り、「好評などというのではなく真の大成功 (vero furore) を収め、観客はシンフォニーからフィナーレの最後まで熱狂し、“ああ、なんて美しい音楽だ！”と叫び続けていました。ファルサが終わると [ロッシーニは] 心のこもった拍手喝采を受けに舞台に呼び出されましたが、こうした恵みは普段は無く、稀なことです。真心からあなたに申し上げますが、[中略] [あなたの息子さんは] これから数年でイタリアの誉れとなり、人は、チマローザが死んでおらずその靈感がロッシーニに乗り移ったと話すようになるでしょう」と称賛し、「春に 1 作、秋に 1 作、そして謝肉祭に 1 作の三つのファルサ」の契約を結びました、と報告している (1月9日付) 7。1月11日付『ヴェネト毎日新聞 (Quotidiano Veneto)』の批評も、「優秀で才能ある若きマエストロは昨年自身の最初の作品を発表していたが、彼はこの作品で自分の名声を堅固なものとした。そして一層の熱狂と繰り返された全員の喝采は、[中略] 真の功績に報いるすべを知る聴衆による確かな評価のしるしである」と絶賛した8。

《幸せな間違い》はシーズン終了の2月11日までに合計14回上演され9、最終日の熱狂を『ヴェネト毎日新聞』が報じている——「本日、マエストロ・ロッシーニ氏の美しい音楽によるサン・モイゼ劇場の優れたオペラ団による一連の公演が終了した。その場を利用してジョルジ=ベッコロに熱烈な感謝が表明され、傑出した芸術家を讃える肖像画や詩がふるまわれた。喝采は偏った追従ではなく、むしろファンたちが一斉に競い合うように、その功績と素晴らしさに衝き動かされて起こった。[中略] 棧敷席から榮譽のしるしに鳩やカナリア、野性のホロホロ鳥が投げ放たれた」(2月11日付) 10。ロッシーニは3月24日付の母宛の手紙に、「ヴェネツィアでは総ての愛好家がぼくのファルサの曲を歌い競っています」11と《幸せな間違い》の反響を伝えている。

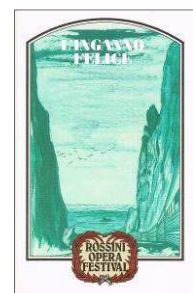
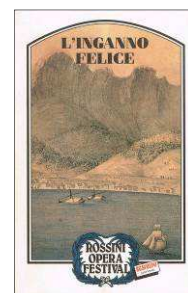
満足した興行師チェーラは春のシーズンに新たな歌手団による再演をサン・モイゼ劇場で行わせ (初日は5月23日)、《絹のはしご》の初演を終えてヴェネツィアに居たロッシーニにイザベッラ役マッダレーナ・チェーラ (Maddalena Cera, 興行師チェーラの妹12) のための新たなアリア (もしもその胸に憐れみ心をお持ちなら (Se pietade in seno avete)) を作曲させ、〈最も優しく愛しいお方に〉と差し替えた。その後は同年秋のフィレンツェ (ペルゴラ劇場)、トレヴィーゾ (オニゴ劇場)、ポローニャ (コロソ劇場) を経て、1813年ヴェローナ (フィラルモーニコ劇場)、ヴェネツィア (サン・ベネデット劇場とサン・モイゼ劇場)、ミラーノ (ラデゴンダ劇場)、トリーノ (カリニャーノ劇場)、フィレンツェ (ペルゴラ劇場)、1814年レッジョ・エミリア、ローマ、ヴァレーゼ、パドヴァ、コモ、ミラーノ (レタージョ劇場)、1815年ジェノヴァ、モデナ、クレマ、プレーシャ、モンツァ、パルマ、ミラーノ (レ劇場)、ナポリ (フィオレンティーニ劇場) と、短期間にイタリア全土に流布した13。上演回数は1819年までの8年間に約60回で、1820~29年の10年間に約110回に達している (その後は減少したが、初演から1868年までの上演回数合計は230に達したという) 14。その過程でロッシーニの関与しない楽曲の差し替えや追加、2幕への改作も数多く行われた15。

国外では1815年12月14日のバルセロナを皮切りに、1816年6月25日ミュンヘン、同年11月26日ウィーン (ウィーンにおける最初のロッシーニ上演)、1817年リスボン、1818年ドレスデン、フランクフルト、ヴァイマル、1819年パリ (王立イタリア劇場。《幸運な間違い (Linganno fortunato)》と解題) とロンドン、1820年マドリッド、ワルシャワ、ポルト、ベルリン、ベルン、1824年リオ・デ・ジャネイロ、1825年ブエノス・アイレスとパルマ・ディ・マヨルカと続き、1830年にはモンテヴィデオ、サンティアゴ (チリにおける最初のロッシーニ上演)、サンクト・ペテルブルク、1831年にはメキシコのベラクルス、1832年にはニューヨークでも上演されている16。

19世紀最後の上演は1850年10月26日のベルリンと思われるが、1872年1月29日にナポリの音楽協会 (Società filarmonica) がリヴァイヴァルしている17。20世紀の復活上演は1956年9月22日と23日シエナのキジアーナ音楽アカデミーにて作曲家ヴィート・フラッツィの校訂版で行われた (《なりゆき泥棒》と二本立て。指揮：マンノ・ヴォルフ=フェラーリ、イザベッラ：レナータ・スコット)。ロッシーニ・オペラ・フェスティバルでは第1回の1980年9月3日に初上演され (演出：ブルーノ・カーリ、指揮：アルベルト・ゼッダ、イザベッラ：マリア・ローザ・ナザーリオ)、1994年8月のグレアム・ヴィック新演出 (指揮：カルロ・リッツィ、イザベッラ：キャスリン・カッセッロ。1980年の上演と同様エディションの記載なし) を経て、その再演が2015年8月に行われた (指揮：デニス・ヴラセンコ、イザベッラ：マリアンジェラ・シチーリア。ディーノ・メニケッティ編のオトス版を使用)。日本初演は1998年6月13日イイノホールにて Tokyo Play Opera が行い (指揮：セルジョ・ソッシ)、2000年9月には新国立劇場・小劇場オ



《イザベル》と改題されたオペラ・コミック版の楽譜 (パリ、A.ルデュック社、1868年)と復活上演の印刷台本(シエナ、1956年)(共に筆者所蔵)



1994年と2015年のROFプログラム

ペラでも上演されている（演出：栗国淳、指揮：星出豊、イザベッラ：森麻季／福田玲子）。

推薦ディスク

・マルク・ミンコフスキ指揮ル・コンセール・デ・テュイルリ イザベッラ：アニク・マシス、ベルトランド：ラウル・ヒメネス、バトーネ：ロドニー・ジルフリー、タラボット：ピエートロ・スパニョーリ、オルモンド：ロレンツォ・レガッツォ 1996年6月録音 Erato 0630-17579-2 (CD)

註：CD1枚に収めるためにレチタティーヴォ・セッコを縮小ないしはカット。

・アルベルト・ゼッダ指揮ブルノ・チェコ室内ソロイスト イザベッラ・コリンナ・モローニ、ベルトランド：ケネス・ターヴァー、バトーネ：マルコ・ヴィンコ、タラボット：ロレンツォ・レガッツォ、オルモンド：サイモン・ベイリー 2005年7月ヴィルトバートのロッシェニ音楽祭上演ライブ Naxos 8.660233-34 (CD2枚組)



¹ 詳細は日本ロッシェニ協会ホームページ掲載の水谷彰良「《ひどい誤解》作品解説」を参照されたい。

<http://societarossiniana.jp/equivoco.pdf>

² Giovanni Carli Ballola, *Sul filo della memoria*. in programma del ROF "L'inganno felice", 1994., p.13. 参照。

³ この題材の文学的モデルに関する最新の論考は、Marco Beghelli, *Un intreccio di trame: i modelli letterari dell'Inganno felice*. in programma del ROF "L'inganno felice", 2015., pp.29-35. 参照。《シジスモンド》の成立とその台本については全集版《シジスモンド》序文を参照されたい。

⁴ Vittorio Della Croce, *Una giacobina piemontese alla Scala, La primadonna Teresa Belloc*, Torino, Eda, 1978., p.93.

⁵ ロッシェニ作品は《幸せな間違い》バトーネ以外に、《試金石》アズドゥルーバレ伯爵、《アルジェのイタリア女》ムスタファ、《イタリアのトルコ人》セリム、《トルヴァルドとドルリスカ》オールドウ公爵、《泥棒かささぎ》フェルナンド、《マオメット 2 世》タイトルロール、《セミラーミデ》アッスールを創唱。

⁶ サン・モイゼ劇場の史料や新聞批評に併演作品の記録がなく、2日目と3日目（1月9日と10日）はジュゼッペ・ファリネッリ作曲《口に出さぬ愛（Amor muto）》との二本立てで上演。バレエはケルビーニ作曲《サン・バルナルド山、またはエリーザ（Il monte San Bernardo, ossia Elisa）》が上演されたものと思われる（筆者による推測）。

⁷ Gioachino Rossini, *Lettere e documenti*, vol.I., 29 febbraio 1792 - 17 marzo 1822., a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Pesaro, Fondazione Rossini, 1992., pp.31-33.

⁸ Eduardo Rescigno., *Dizionario rossiniano*, Biblioteca universale Rizzoli, Milano, 2002., p.530.

⁹ Della Croce, op.cit., p.96 と p.175. は「34回」とし、拙著『プリマ・ドンナの歴史 II』でもこれを踏襲したが、Miggiani, op.cit. では14回しか確認できず、ここに訂正する。

¹⁰ Della Croce, p.96.

¹¹ Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Pesaro, Fondazione Rossini, 2004., pp.6-9. [書簡 IIIa.2]

¹² Bruno Cagli, *La donna salvata dal mare*. in programma del ROF "L'inganno felice", 1994., p.34. ではチェーラの娘と推測されたが、Andrea Malnati, *Da Venezia al Nuovo Mondo: fortuna e tradizione dell'Inganno felice*. in programma del ROF "L'inganno felice", 2015., p.16. において妹と修正されている。なお、サン・モイゼ劇場の春季プリマ・ドンナは他の歌手が務め、マッダレーナ・チェーラは《幸せな間違い》のみ出演。

¹³ 以上 1813～15 年の上演記録は、A cura di Marcello Conati, *Contributo per una cronologia delle rappresentazioni di opera di Gioachino Rossini avvenute in teatri italiani dal 1810 all'anno teatrale 1823*. (in *Atti dei convegni lincei 110, La recezione di Rossini ieri e oggi. Roma 18-20 febbraio 1993*, Roma, Accademia nazionale dei lincei, 1994., pp.231-250)] 及び Malnati, op.cit. に基づくが、独自に追加した劇場名もある。但し、コナーティの挙げる 1813 年 1 月以降 トリエステと 1815 年 8 月 フェルモの上演は誤謬と判断して削除した（トリエステの上演記録は最初のロッシェニ上演を 1814 年とし、フェルモは後にコナーティが作成したマルケ州の上演記録で除外されている [1816 年の可能性あり]。）。

¹⁴ Malnati, p.14.

¹⁵ 変更の具体的事例は *ibid.*, pp.16-19. を参照されたい。

¹⁶ 国外での上演記録は Alfred Loewenberg., *Annals of Opera 1597-1940*, John Calder, London, 1978., p.624. を基に、Malnati, p.14. によって増補修正した。

¹⁷ Loewenberg, p.624.